

AI 活用で挑む学問の革新と創成
2021 年度採択研究代表者

2022 年度
年次報告書

中尾 悠里

富士通(株) 富士通研究所
研究員

AI と人の相互作用による技術哲学の創出

研究成果の概要

本課題ではパーソナライゼーションを通じて、ユーザーの変化からの影響を直接的に受けるという AI 技術の特徴を加味した新たな技術哲学の創出を行う。この新たな技術哲学により、人間と技術のインタラクションに関する新たな規範を提示することを狙う。インタラクションを考慮するために、研究期間では人間の価値観の変化に伴いインタラクティブに変化する AI ツールの開発・評価を主に行う。

AI ツールの開発のために、本年度は検索システム・情報収集活動について人々が持つ価値観を利害関係者から抽出し、技術／非技術施策を考案するワークショップ研究を行った。具体的には、多様なインターネットスキルを持つ 10 名の参加者を一般から募り、3 回のワークショップを実施した。3 回のワークショップはそれぞれ、参加者の価値観の抽出、参加者が必要だと思う施策の提案、参加者自身が考えた施策への評価を行うためのものである。これらのワークショップは、科学技術社会論における研究開発ガバナンスの方法論である「責任ある研究・イノベーション (Responsible Research and Innovation: RRI)」の手法を応用し、参加者が技術だけでなく、社会的な価値観を考慮しながら技術に関する意思決定を行う、省察性 (Reflexivity) を持つように設計された。

結果として検索システム・情報収集活動に関する多様な価値観、及びその価値観に対応する技術・非技術施策の案を参加者から得た。この結果に基づき、検索システムのユーザーインターフェースのプロトタイプを作成し、参加者に評価してもらった。結果の分析により、参加者は自身が持つ価値観や自身らが提案した施策に対して批判的な観点を持ちつつ、省察性を発揮して意思決定を行うことができることが明らかになった。

上記の研究の進捗については 11 月 26 日、27 日に開催された第 21 回科学技術社会論学会年次大会にて発表した。

【代表的な原著論文情報】

1) 中尾悠里, 藤垣裕子, “技術設計過程における「反射性」の組み込み ～ユーザーとの共同デザイン方法論の検討,” 第 21 回科学技術社会論学会年次大会, 東京工業大学, Nov. 2022.